



跨文化

传播视角下的 日本学研究

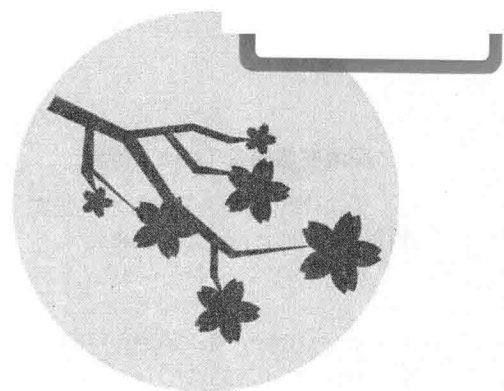
主 编 孙敦夫

副主编 毋育新 吴少华

编 委 孙 逊 曹珺红 徐 靖



浙江工商大学出版社
ZHEJIANG GONGSHANG UNIVERSITY PRESS



跨文化

传播视角下的 日本学研究

主 编 孙敦夫

副主编 毋育新 吴少华

编 委 孙 逊 曹珺红 徐 靖



浙江工商大学出版社
ZHEJIANG GONGSHANG UNIVERSITY PRESS

图书在版编目 (CIP) 数据

跨文化传播视角下的日本学研究 / 孙敦夫主编. — 杭州 :
浙江工商大学出版社, 2016. 9
ISBN 978-7-5178-1684-3

I. ①跨… II. ①孙… III. ①日本—研究—文集
IV. ①K313.07-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2016) 第 131346 号

跨文化传播视角下的日本学研究

孙敦夫 主编

责任编辑	姚媛
封面设计	林朦朦
责任印制	包建辉
出版发行	浙江工商大学出版社 (杭州市教工路 198 号 邮政编码 310012) (E-mail: zjgsupress@163.com) 电话: 0571-88904970, 88831806 (传真)
排版	杭州雅紫斋文化创意有限公司
印刷	杭州恒力通印务有限公司
开本	787mm×1092mm 1/16
印张	23.75
字数	562 千
版次	2016 年 9 月第 1 版 2016 年 9 月第 1 次印刷
书号	ISBN 978-7-5178-1684-3
定价	59.00 元

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江工商大学出版社营销部邮购电话 0571-88904970

前言

“2015 日本学国际研讨会暨中国日语教学研究会西北分会成立大会”于 2015 年 5 月 9 日至 10 日在西安外国语大学召开。此次研讨会的宗旨在于进一步提高我校日语教师的科研能力和教学水平,加强西安外国语大学日本文化经济学院与西北地区乃至国内外大学之间的学术交流,促进中日两国在语言学、文学、经济学、日语教学、文化等研究领域的交流,共同商讨在新形势下日语专业如何发展等课题。

同时,此次研讨会还成立了中国日语教学研究会西北分会。众所周知,西北地区从其面积来说,占中国的总面积的将近三分之一。然而,这个地区长期以来却没有中国日语教学研究会的分会,该区域内的各大学之间的交流也较少。此次,在中国日语教学研究会的支持下,我们成立了西北分会,旨在推进教师之间的交流,校际学术交流、教学资源共享和教师培训等工作的开展。

此次研讨会的开幕式上,西安外国语大学前校长刘越莲教授为研讨会致开幕词,中国日语教学研究会会长、北京日本学研究中心徐一平教授为大会致辞。卡西欧中国贸易公司副总经理岩丸阳一先生、西安外国语大学日本文化经济学院院长孙敦夫教授也分别致辞。我们还邀请了日本日本语学会理事、青山学院大学近藤泰弘教授,武藏大学大野淳一教授,上海外国语大学日本文化经济学院院长许慈慧教授做了主旨演讲。此次参会的人员有来自中日两国约 50 所大学、研究所的 101 名教师和研究生,其中 91 人发表了研究成果,涵盖包括语言、文学、日语教学、翻译、文化、历史、外交、哲学思想、经济、语料库开发等多个领域。

此次研讨会的特点是年轻人踊跃参加,据统计,讲师、助教、研究生的比例占参会人员的 60%。此外,西安外国语大学日本文化经济学院的教师及研究生的参会人数达 23 人,占参会人员的 20% 以上。

为了将各位参会人员的科研和教学成果推向社会,让更多人得惠于此,我们对征集的文稿进行了严格的评审、筛选、再次修改、重新评审等程序,最终精选出篇,编成了这本论文集,予以出版。论文集分为基调演讲、日本语学、日本文化、日本文学、日本语教育、翻译理论与

实践五个部分,较完整地反映了本次大会的盛况。

此次研讨会能够成功举办,得到了中国日语教学研究会、国际交流基金北京日本文化中心及各位主旨演讲者的大力支持,同时也得到了卡西欧贸易有限公司、浙江工商大学出版社的积极协助,在此表示衷心的感谢。在学会筹办方面,毋育新、段笑晔、南海、韩思远、陈曦、王琰、赵小宁、张鑫、张忠锋、曹捷平、杨晶晶、徐坚、赵心僮、谭林、李佳、周梦瑶等老师付出了辛勤的劳动。在论文集的编辑、出版方面,吴少华、孙逊、徐靖、曹珺红等老师付出了辛勤的劳动,孙敦夫、毋育新、吴少华、南海、张忠锋、徐靖、曹珺红、孙逊等老师参加了审稿工作,在此一并表示衷心的感谢。

由于文稿数量多,编辑工作量大、时间紧,本论文集存在的不当之处,敬请作者和读者指正。

孙敦夫

西安外国语大学日本文化经济学院院长

2015年12月3日

目 录

基调演讲

新世纪高校日语专业学科发展与现状研究

——聚焦全国及西北地区新建本科日语专业 / 2

日本語コーパスと文法研究 / 10

作家漱石を通して見た日本の近代史 / 21

日本语学

文法概念としての「変化」 / 32

浅析处在状态转变前「もう」和「まだ」的作用及其定位 / 39

日汉「肩」(肩)语义扩展的认知考察 / 45

中国的日语文化语言学理论研究现状调查 / 53

现代汉语的“发明”一词 / 56

待遇表现的导入分析概述

——以《综合日语》(修订版)系列教材为例 / 62

中日の時間を表す“周”と「週」「ウィーク」の使用に関する考察

——在来語と外来語の關係の視点から—— / 66

汉语中来自日语的外来语 / 76

日本文化

近代日本哲学思想的双重性格特点初探 / 82

“茄子”相关惯用句的中日对比研究 / 87

崇尚“强者”的孤独者

——日本人 / 95

敵討ちについての一考察 / 104

试论井上靖的早期中国旅行与其中国观的形成 / 111

试论山片蟠桃的世界观 / 119

试论日本人的集团主义特征的本质与嬗变 / 125

“水土论”视角下的近世日本的华夷观念 / 131

「女生徒」試論

—定められた運命への従順と抵抗— / 136

日本文学

安部公房“变形”作品《棒》的现代寓言性 / 144

『懷風藻』における和漢比較

—白話等の受容に関する考察— / 150

影の形に添うごとく

—「伊豆の踊子」試論— / 158

阿力的精神错乱及自我意识的萌芽

——读樋口一叶的《浊流》 / 165

村上春树作品中“我和少女”的人物关系分析 / 172

江戸时代《叶隠》被禁始末 / 177

1840—1900 年间中日传统诗改革比较

——以古典诗和短歌为中心 / 183

阴影与人格发展

——重读村上春树《第七个人》 / 187

異彩を放つ又吉栄喜の動物ワールド

—「木登り豚」と芥川賞受賞作「豚の報い」を中心に— / 194

日本語教育

中日认知差异与惯用语教学对策 / 204

基于口语语料库的中国学习者日语复合动词使用研究 / 210

“翻转课堂”在高校日语语法课程的应用 / 217

あいさつ表現の使用制限の要素について

—日中対照の視点から— / 221

持続可能性日本語教育を経験した中国の大学生の振り返りの分析 / 227

多人数会話におけるあいづちと非言語行動の関連性分析 / 233

- 日语阅读课堂上的电子词典使用分析 / 239
- 基于名词物性结构的日语多义形容词核心语义解析
——以多义形容词「高い」为例 / 248
- 中国人日本語専攻大学生の日本語学習に対する動機づけ
——アンケート調査・インタビュー調査を通して—— / 255
- 跨文化交际背景下日语泛读课的教学策略研究 / 262
- 浅议在课堂中融入交际型教学语法的重要性 / 267
- 日本现代流行歌曲在日语文言教学中的应用
——结合「時代おくれ」之中否定助动词「ず」的用法 / 272
- 日本語専攻大学生における学習動機の分類に関して / 276
- 运用响度特征量的日语学习者促音与非促音的误听辨分析
——以汉语母语者为对象 / 286
- 日本語と中国語の複合動詞における自他交替の対照研究
——「結果性」と「完了性」による分析—— / 294
- 日本語相づちの機能について学習者と母語話者の使用実態の比較 / 302
- 小集団討論における視点転換に関する中日対照研究 / 310
- 语料库在线检索系统 NLB 在近义词研究中的运用 / 317
- 多重授受文の使用状況の考察 / 324
- 日语“使役”和“被动”接近的语义解释 / 331
- 連体修飾節のタについて
——「{*激しかった／激しい} 雨が降った。」を中心に—— / 336

翻译理论与实践

文学翻译中的文本解读

- 以芥川龙之介《桔子》为例 / 346

关于钱稻孙的《万叶集》中译本研究 / 351

文学作品中日语复合动词的翻译研究

- 夏目漱石作品中出现的「～込む」复合动词为中心 / 357

文学翻译中的归化与异化

- 《青梅竹马》两译本比较研究 / 366

基调演讲

新世纪高校日语专业学科发展与现状研究

——聚焦全国及西北地区新建本科日语专业

曹大峰

(中国·北京日本学研究中心)

1. プロジェクトの概要

1.1 プロジェクトの企画背景

学習者世界一となった中国日本語教育の発展には、大学の増長が大きな割合がある。中でも、日本語学科の新設は3倍増と目立つ。多様な困難を抱えて努力する新設学科への支援が必要であるが、その基礎となる教育実態に関する調査と研究は大変不足している。中国の日本語教育の現状と今後の行き方を把握するには、大学新設学科の発展状況と教育実態の調査と研究が不可欠であろう。

1.2 プロジェクトの計画内容

外国語教育学と教育評価に関する理論と方法に基づいて、2000年以来新設された中国大学日本語学科を対象に、その教育実態（教育目標・カリキュラム・教員構成・運営実績・コース特色・学習状況・現存問題など）を調査し、そのデータベースをもとに全体および各地域の状況と傾向を分析し対照的に考察する。代表性のあるケースを選定し実際に教員と学生への聞き取り調査と現場検証を通して、さらに具体的な状況を分析しその背景と原因を考察する。

1.3 プロジェクトの期待目標

調査と研究を踏まえて、ここ十数年中国の大学における日本語教育の速やかな発展の実態とその背景をはっきり認識し、現在の状況と今後の課題を提示する。調査結果と研究成果をデータベースと研究報告で公開することによって、中国大学専攻日本語教育の現状と今後の行き方への関心及び新設学科への有効な支援をアピールし、そのための研究と連携が促進されると期待する。

1.4 プロジェクトの実施方法

実施方法

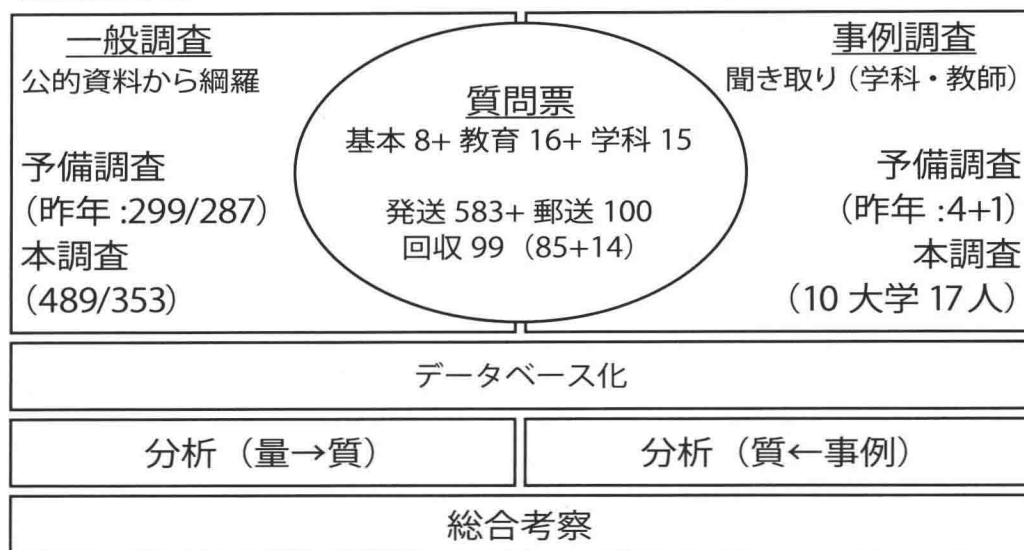


図1 本研究の実施内容と方法

図1に示されるように、本プロジェクトは調査（ネットや出版物など公的資料による一般調査、調査票による現状実態調査、メールや電話の聞き取りによる事例調査）、現場検証（必要により実地訪問）、データベース化（回収したデータを整理し検索分析可能にする）、分析と考察（研究計画の課題を分担し、データに基づいて分析と考察し、内部研究会で総合的に考察する）、公開（データベースと研究報告をまとめて関係機関と研究者の請求により配布し国内外の研究会議で成果を公表する）などの段階と方法で実施された。

2. 量的調査の結果と分析

ここでは、主に新設日本語学科の設立時間、地域分布、大学ランク、学生数、教師数、及び専攻コースといった6つの面から調査の結果を報告する。

2.1 設立時間

2000年以降は、日本語学科の設立がブームとなり、平均毎年25校のスピードで14年間353校増えた。図2で時期別に全国の発展状況を見れば、2004年には44校増え、ピークとなっていること、また、その後スピードが落ち始め、2012年に4校と大きく減るが、2013年には10校へと持ち直したことが分かった。一方、西北地区の状況はほぼ同じ傾向にあるが、2006年以降は上がったり急落したりまた上がったりして不安定な時期が目

立っている。これは経済的發展がやや遅い内陸地区での日本語人材需要状況の不安定の表れかもしれない。

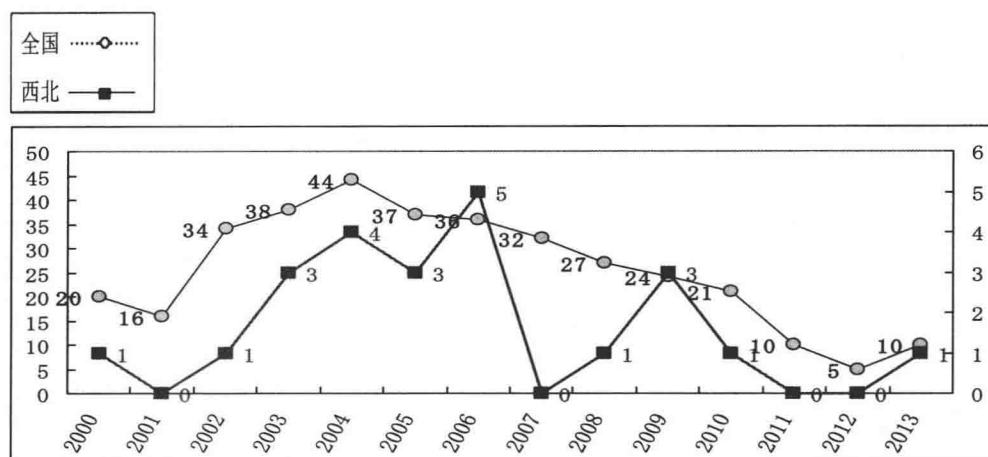


図2 時期別日本語学科の新設状況（全国と西北地区）

2.2 地域分布

政治と経済が発達する東部地域は新設学科の主な分布地域であり、全体の48%を占める。次は中部地域(23.9%)、西部地域(18.2%)と東北地域(9.9%)の順で続く。新疆を除いた30省と自治区では日本語学科の新設が続いたが、新設数の1位は広東省(29校)であると一般の予想を超えた。2位は江蘇省(28校)、3位は山東省(27校)、西北地区は浙江省と並んで4位(23校)を示している。

2.3 大学ランク^{〔1〕}

新設学科の中で、「一本」大学は42校で全体の11.65%、「二本」大学は192校で54.54%、「三本」大学は120校で33.81%となっており、「二本」と「三本」の大学は目立って多い。特に「二本」大学は全体の半分以上を占めるが、新設数が一番多いのは山東省(21校)である。それに対して「三本」大学の新設数が一番多いのは江蘇省(13校)である。また、新設学科の353校の中、修士課程を持つ大学は14校(内「一本」大学9校、「二本」大学5校)、博士課程を持つ大学は1校ある。

西北地区では「一本」大学は3校、「二本」大学は14校、「三本」大学は6校、修士課程は1校である。

〔1〕中国では大学の教育レベルにより学生募集の優先度を一般には「一本」「二本」「三本」とランク付けする。

表1 西北地区の新設日本語学科（設立時間順）

西安翻译学院	3 本	2000	北方民族大学	2 本	2006
宁夏大学	2 本	2002	青海师范大学	2 本	2006
长安大学	1 本	2003	陕西理工学院	2 本	2006
西安电子科技大学	1 本	2003	西安工业大学	2 本	2006
西北师范大学	2 本	2003	延安大学	2 本	2006
陕西师范大学	1 本	2004	西安培华学院	3 本	2008
青海大学	2 本	2004	安康学院	2 本	2009
青海民族大学	2 本	2004	西安文理学院	2 本	2009
西安工业大学北方信息工程 学院	3 本	2004	西安交通大学城市学 院	3 本	2009
渭南师范学院	2 本	2005	西藏民族学院	2 本	2010
西安外事学院	3 本	2005	咸阳师范学院	2 本	2013
西安工业大学明德学院	3 本	2005			

2.4 学生数

新設学科の学生総数は92441人、広東省（8711人）、山東省（8361人）、江蘇省（7811人）、浙江省（5875人）と遼寧省（5861人）は上位5位を占め、全体の4割近くに当たる。しかし、各大学の平均学生数からすれば、上位5位は遼寧省、黒竜江省、天津市、重慶市と山東省であり、これらの省と直轄市にある大学の学生募集規模が大きいことが窺える。

西北地区の学生募集規模はやや少なく、4201人であり、全体の4.5%である。

2.5 教師数

新設日本語学科の教師総人数は4699人、江蘇省（334人）、山東省（340人）、浙江省（339人）、遼寧省（272人）と広東省（311人）は上位5位。一方、日本人教師の総人数は651人、浙江省（64人）、山東省（60人）、江蘇省（63人）、広東省（45人）と遼寧省（37人）は上位5位を占める。西北地区ではそれぞれ210人と32人である。

また、教師対学生の比率（表2）からみると、各地域のとも国の評価基準（優=1:14 良=1:16 合格=1:18）より低い、西部地域は学生数が少ないため、教師総人数対学生の比率が国の評価基準に近い。その中で西北地区では1:17と最もよい水準を示している。東部地域の日本人教師対学生の比率は割によく見えるが、学生の募集規模が大きい、教師総人数対学生の比率がよくない。

表2 地域別と西北地区教師対学生の比率

地域分布	中国人教師＋日本人教師		
	教師総数	学生数	比率
東北地域	595	11666	1:19.6

続 表

地域分布	中国人教師＋日本人教師		
	教師総数	学生数	比率
東部地域	2374	46591	1:19.6
中部地域	983	20126	1:20.5
西部地域	747	14058	1:18.8
合計	4699	92441	1:19.7
西北地区	242	4201	1:17.4

2.6 専攻コース

表3の調査結果に見られるように、新設日本語学科は主に「応用型」「複合型」の人材の育成を目標としている。経済の発展に応じて現れた「ビジネス日本語」「ガイド日本語」と「日本語翻訳・通訳」は人気のあるコースとして注目される。また、開設した科目から見れば、新設学科の多くは各コースに相応しい科目を設けているが、コースと科目が不相応の大学も少数見られた。

表3 コースの類別及び量的分布

専攻コース		大学数(校)	
類別	専攻コース	大学数	合計
学術型	日本語学日本文学	38	57
	日本語教育(師範類を含む)	19	
応用型	ビジネス日本語	87	241
	ガイド日本語	20	
	日本語翻訳(通訳)	12	
	コンピュータ日本語	12	
	科学技術日本語	9	
	服飾デザイン日本語	2	
	秘書日本語	2	
	国際エンジニアリング日本語	1	
	その他	96	
複合型	学術＋応用	113	120
	二言語	7	

3. 事例調査の結果と分析

ここでは、新設学科の中、数が多い「二本」の大学6校、「一本」と「三本」の大学それぞれ2校を対象に事例調査の結果と分析を報告する。上記10校の基本情報は表4の通りである。

表4 10校の基本情報

学校	ランク	分布	設立時間	学校	ランク	分布	設立時間
A	一本	東部地区(上海)	2002	F	二本	中部地区(河北)	2009
B	一本	東部地区(福建)	2003	G	二本	西部地区(青海)	2004
C	二本	東北地区(遼寧)	2003	H	二本	西部地区(陝西)	2010
D	二本	中部地区(江西)	2007	I	三本	西部地区(陝西)	2009
E	二本	東部地区(山東)	2008	J	三本	東部地区(広州)	2007

地域分布から見れば、学校が多い東部地域の4校、地域差が大きい西北地区の3校、中部と東北地域それぞれ2校と1校という構成であるが、アンケート及びインタビューの結果に基づき、上記10校の教育実態を次のように分析する。

3.1 基本状況

(1) 新入生数: 一部の大学の新入生数が減る傾向にある。例えば、F校では2008年74名、2009年54名、2011年以降は毎年30名となった。西北地区のI校では2009年は50名、2013年は19名しかいなかった。その影響要因は主に中日関係、日系企業の変化、将来の見通しなどという。

(2) 教員の構成: 各大学では教師の数はほぼ飽和状態。中には修士号を持つ人が最も多く、年齢がほとんど20—30代。教師の職階構成は講師が多く、教授と準教授がいない大学もあり、不均衡な状態である。例えば、2002年設立したA校では、教授と準教授の数が三分の一を占めるが、2007年設立したD校では、教師8名の中に教授がいず、準教授が一人のみである。2010年設立した西北地区のH校では教師7名の中、講師6名と助手1名の状態である。設立時間が遅いほどその問題が目立つ。

3.2 教育実態

(1) コースの特色: 10校の内、1校を除き、社会のニーズ、地域の特徴或いは所属大学の特徴などにより、特色のある学科と専攻が設立された。例えば、A校の日本語学科では日本言語文学と日本経済貿易という二つの専攻に分けられ、C校の日本語学科では五年制で、学生は日本語学とソフトウェアプロジェクトというダブル学位がもらえる。D校の日本語学科は所属する理工系大学の優勢を生かし、科学技術日本語を設けた。西北地区のG校とH校ではチベット族の学生が多いので、日本語専攻を一般向けとチベット族向けの二つに分けられた。10校の内、4校がビジネス日本語専攻を開設した。

(2) カリキュラム: カリキュラムは各大学とも専攻とも緊密に関わる。例えば: C校は日本語とソフトウェアのダブル専攻として、日本語のほかにソフトや計算機に関する科目も多く設置。ただ、日本語の授業とソフトウェアの授業をどうやってうまく融合させるかは現在直面する問題である。また、多数の大学では社会のニーズにより、カリキュラムの調整をしているが、調整方法や実践科目の設置には差がある。

(3) グローバル化: 学生の日本留学チャンスの差から、各大学のグローバル化の努力と条件の差が見られる。例えば、A校では学生の留学が多様な形で積極的に支えられ、しかも行く前に課題設定とプロジェクト化を導き日本で完成させるというやり方が導入され、学生の成長に結び、留学先の大学にも評価されたという。西北地区のG校では、学科設立当初は留学のルートがなかったが、努力でやっと一人の学生を送り出し、その学生を通してさらに日本の大学と連絡を広めた結果、今は毎年3～4人が行けるようになった。それに対して、D校、J校と西北地区のH校では学生の留学チャンスはまだないようである。

3.3 学科状況

(1) 研究実力: 同じランクの大学の日本語学科の間でも研究実力には差がある。両方とも「一本」大学のA校とB校では、A校の実力は割りと強く、省レベルの研究助成プロジェクト4個、市庁レベル2個、学術誌掲載論文が毎年一人当たり3本であるが、B校は省レベルのプロジェクトがなく、掲載論文が毎年一人当たり1本のみである。「二本」大学の間にも差が大きい。その影響要素は次の三つあるという。①研究リーダーがいるかどうか、②教師に強く研究実績を要求するかどうか、③授業の負担が大きいかどうかである。

(2) 改革意識: 大学ごとに直面する難題は異なるが、全体として学科責任者は社会の変化に応じて改革の意識を持っている。主に学生の就職、教育問題、科目間の連結、カリキュラムとニーズの対応、地域問題など改革意識があるが、実施に移行することは難しいと言う責任者もいる。

(3) 教師研修: 各大学では教師研修への支援程度が異なり、毎年研修に参加する教師の数も違う。一方、研修情報が大学の職場に届かないという問題も指摘された(「三本」大学の教師)。

4. まとめと今後の課題

上述の結果から分かるように、大学日本語学科の75%を占める新設学科の存在は中国の日本語教育の発展と経済社会の建設に大きく貢献しているのが見逃せない事実であろう。

新設学科には多様な問題と困難を抱えるが、主に学生の入れ過ぎ、教員構成の不均衡、研究リーダーの不足、学科建設の遅れなど目立っているのが今回の調査で分かり、これか

らはさらに全体的な評価・調整・支援が必要であろう。

また、一部の新設学科の発展には目を眩る実績と成果があり、その方策の研究と参照を広める意義があると痛感したところである。逆に少数の新設学科（青海大）は学生募集ストップ、存亡の選択に迫られる。

西北地区に関しては、学科数少ない地域として中国の日本語教育における位置づけが特殊といえよう。西部地域の中心として、全国と同じような問題を抱えながらも、独自の特色と課題があるようだが、具体的な事例調査と質的研究が不足している。

そこで、今後も引き続き考察すべき課題を次にあげる。

- (1) 地域間または西部地区の新設日本語学科の内訳とその対照分析。
- (2) 同じランク内と異なるランク間の特徴と対照分析。
- (3) 同じランクで学科の発展状況に大きな差がある事例の原因の究明。
- (4) 学科発展のために研究リーダーを備え教師の組織構成を合理化・均衡化にする得策の調査。
- (5) 各ランクの大学の教育実態を評価する基準（同じ基準かランク別の基準か）。
- (6) 中日関係の変動による学生数減に直面する大学の日本語学科の対応動向。
- (7) 2000年以前設立した学科の教育実態との対照分析。

以上、本プロジェクトの概要と成果を西北地区の状況に触れて報告したが、調査のデータは既にデータベース化しているので、関心ある大学や研究者に公開する予定である。今後はもっと多くの研究者とともに調査データを利用して研究の輪を広めていけばと願っている。

作者简介

曹大峰, 北京日本学研究中心教授, 博士生导师, 研究方向: 日本语学、语料库语言学。

联系方式

(E-mail) cdfeng2005@163.com